

空手道詳説（9）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略

（12）察度王統第二代の武寧王

天女（天飛）の子という伝説が残るほどの評判を持ち、決断力に優れ、偉大であった察度は、『俺の毛むじゃらで黒い腕は、ある日ハブにかまれた時、家来の一人が自分の腕を切って俺の腕とすげ替えてくれたのである。それ以来こんな腕になったのだ』とうそぶくほど豪快な一面もあった。察度の治世は、彼の有能な才気以外にも、時勢の流れによる転換期にあつて、ひとりでの歴史が動く宿命的な幸運児であったと見ることでよい。



永楽帝画像

琉球の前途を開いた察度が1395年に74歳で没すると、翌年、世子・武寧（ぶねい。1356～1406年、在位：1396～1405年）が王位を継承した。

とかく父王と比較されがちな武寧は、誰の目にも影が薄く映ったのは致し方ない事象だったかもしれない。

武寧の治世は僅か10年で終わるのだが、在位中の1404年には明の第三



永楽通宝

代・永楽帝（1360～1424年、初代・洪武帝の四男。在位：1402～24年）から、中山王として琉球国初の冊封（さくほう）を受けることになる。

室町時代中期に日本に大量輸入され、江戸時代初期まで流通した「永楽通宝」は、永楽帝の時代に鑄造された銭貨として多用されている。

(13) 冊封制度について

引き続き沖縄史を進めるに当たり、「冊封」という言葉が随所に出るので、ここで注釈を加えておきたい。

中国における封建制度は、古くは殷を倒して王朝開いた周（紀元前1046頃～前256年）まで遡るとされているが、冊封という形が整うのは前漢（紀元前206～後8年）の時代である。その始まりは、南越国（中国南部からベトナム北部地方で自立した王国）と、朝鮮半島で最初に登場した国家とされる衛氏朝鮮に対して行われたのが歴史上確実視されている。それぞれ「南越王」、「朝鮮王」の冊封を受け、漢の藩国となっている。

その意味は、「冊（文書）を授けて封建する」で、後々の封建制度の原型である。前漢以降の各時代、いずれもこの封建制度を敷き、最後の統一王朝となった清（1644～1912年、満洲族の愛新覚羅が建国）に至るまで続く。

また、中国の統一君主（皇帝）は、自らを「天子」と称した。「天子」とは、『天命を受け、自国のみならず周辺諸国を支配下に置き、教導する使命を授かった君主』の意味で、冊封は称号や任命書、印章などの授与をもって、宗主国を自認する天子（皇帝）側が、近隣国の君主（王など）との間で君臣関係、あるいは利害同一関係が成立する形態であった。

冊封を受けた国のことは「冊封国」といって、授けた側の天子は、冊封された領域内の自治自立を認めていたから、冊封故に中国の領土となった訳ではない。

それに、冊封国君主の臣下たちは、あくまでもその臣下であって、中国皇帝とは直接的な関係を持たない。したがって、冊封関係は互いに認め合った外交関係の証しで、中国を中心とした外交上の秩序を形成するものと見なしていい。

冊封国側は、毎年の朝貢と中国の元号や暦を使用することが義務付けられ、中国から出兵を命令されることもあったが、その逆に冊封国が攻撃を受けた場合は中国に対して救援を求めることもできた。琉球国の場合、後に取り扱う「薩摩侵攻」（1609年）による島津藩の統治を経て、「琉球藩」となる明治5年（1872年）まで、明国、並びに清国の冊封体制の中にあった。

琉球国の明に対する朝貢のはじまりは1372年で、国交が開始された推移は1月の(9)のところで詳しく述べた。この朝貢を起点として冊封につながり、琉球王が死去し新

たな王が就いたごとに「冊封使節団」が派遣され、公式な即位の認証行為として冊封を授かった。

冊封使を長とする使節団の来琉は、琉球王朝にとって最大といえる行事で、式典のために約5百人もの使節団が訪れ、およそ2百日あまり滞在するため、この期間中の持て成しに心を砕き出費も嵩んだが、大国の明との親交は決して損な取引でなかったはずである。

式典の中では、『天子の権威は国内外に伸長しており、琉球国も冊封体制の一員である自覚を持って行動すること。天子は冊封使を琉球に派遣し、新しい王を冊封するので、琉球の全ての人民は王の治世が成り立つように心を合わせ、琉球の繁栄のために努力しなければならない』という主旨の詔（みことのり）を読み上げ、それをもって後継王の即位が承認されるのであった。

察度の死によって武寧が王位に就き、8年目にして琉球最初の冊封使節団が訪れた。以降、最後の琉球王となる尚泰（1843～1901年。第二尚氏王朝第21代、在位1847～79年）の代に至るまで冊封体制は続く。尚泰王への冊封使節団は、1866年に派遣されている。

池田奉秀著「古流現代空手道集義」（日本空手道常心門出版部発行）第一巻6頁に、琉球王名、渡来年、正使名（官職）、副使名など詳しく掲載されているので、知りたいときは参照されたい。

(14) 察度王統の滅亡

武寧が国王となって約10年が過ぎた1405年、琉球国内統一を目論む思紹・巴志の親子が浦添城に襲来してきた。その時、武寧の臣下たちのほとんどが思紹側に味方したというから、武寧に信望がなかったのか、施政への期待感に欠けていたかは明確でないが、巴志の攻撃を前に武寧を守ろうとする者は少なく、敗色は明らかになった。

戦いは激戦となることもなく、あっけなく決着に向かった。武寧は浦添城を逃れ出たものの、後の消息はようとして不明である。

密かに匿われ余命を全うしたのか、名もない人の手にかかり金品を奪われた後に落命したのか、哀れにも墓の存在すら分かっていない。

察度、武寧と二代にわたって華々しく統治した王統は、明との国交と交通を開く文明開化と国利をもたらしながら、二代57年をもって終焉を告げた。

私見を述べるなら、武寧の敗走は、必ずしも人徳の欠如ばかりが原因でないと思う。武力攻撃が開始された1405年なら、父・察度の滅後10年であり、未だ察度の恩顧を受けた家臣団が数多存在したはずである。二代目を支えなければと忠誠を尽くす高官がいて不思議はない。

それなのに、粗方の家臣が思紹・巴志方の集団に吸収されていくところに、単に

武寧王という個人問題以前に、察度生前の所業に不満を持つ者や、批判的な分子の存在があったのではと推察される。先代の治世以降長く鬱積していたものが積み重なった可能性は否定できない。



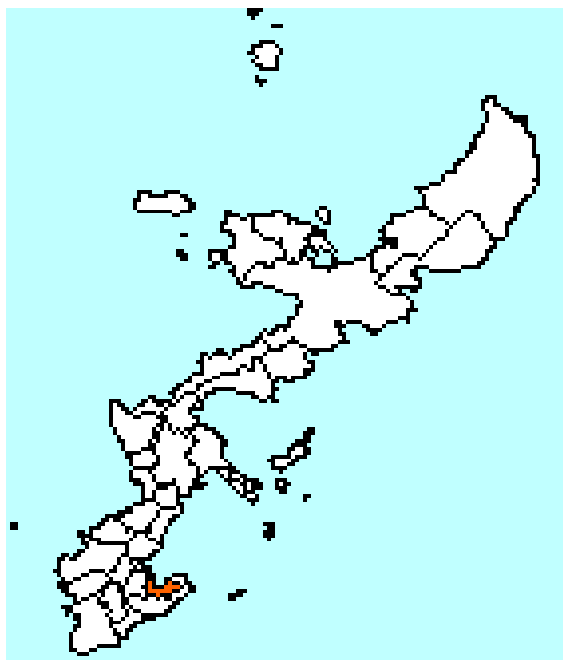
浦添城（うらそえぐすく）址



浦添城址から市街地を望む

(15) 尚思紹と巴志親子

尚思紹（しょう ししょう、1354～1421年。在位1439～44年）は南山の佐敷（現・南城市）按司であった。その世子・尚巴志（しょう はし、1372～1439年。在位1421～39年）は、父が39歳で佐敷按司を引退すると、21歳の若さでその跡を継いだ。



思紹の地領である佐敷は、浦添と同様に耕作に適した土地に恵まれ、馬天（ばてん）という港があって、ほど遠くないところに与那原（よなばる）港もあった。右地図の赤色が現在の佐敷町を示す。

巴志は、両港に入る商船から鉄材を買い取り、農具に加工して農民に与えるとともに、名と財を成し力量を蓄えた。

武寧を攻撃し察度王統を滅亡させた巴志は、それまで浦添にあった王城を首里（すい。現・那覇市の北東部）に移して拡張された。

巴志は、実権は自ら握りつつも、一度引退した父の思紹を中山王として即位させた。これが、後に第一尚氏といわれる王統の始まりとなった。



首里城址から海を望む

首里は、遷都以前から高台の一部に城（ぐすく）が築かれており、立地条件に適っていた。築城は巴志の統一国家構想を遠望する拠点として整備されていくのである。

何故、巴志は隠居後の身である父の思紹

を王位に就けたのだろうか。

佐敷按司であった巴志は、南山地方では財力も豊かで押し出しが効き、新興勢力として傑出していたが、南山に勝る中山王となれば、いかにして衆目を集めるか腐心したはず。残るは信用度と人徳の問題と考えたようである。

その結果、自らは一步退き、一度引退した思紹を表に出すことで、有徳の士としてイメージアップを図った可能性は否定できない。

もう一つ付け加えるなら、「沖縄の歴史」（宮城栄昌著、55頁）に記述された次の文章である。

思紹は中国に対し、終始察度王統の武寧の子と称している。それを称することによって、易姓革命の事実を隠蔽しようとしたからである。

武寧の子など名乗るなど、勿論まやかしである。それに易姓革命とは、広辞苑（岩波書店）によれば、「中国古来の政治思想。天子は天命を受けて天下を治めるが、もしその家（姓）に不徳の者が出れば、別の有徳者が天命を受けて新しい王朝を開くということ。」とある。また、岩波・国語辞典では「中国古来の政治思想。天は徳の高いものを天子として万民を治めさせ、子孫相継ぐが、もしその家（=姓）に不徳の者が出た場合は、その命をあらためて（=革）別の家の者に変える（=易）とする。」となっている。

思紹王時代、1407年に冊封使節団は派遣されているが、詳細は不明である。

なお、姓の「尚」は自ら名に付け加えて名乗ったもので、姓を加えるのは中国の習いとして取り入れた。後に第一尚氏王統といわれるこの家系以前のお王たちは、姓は無く名のみであったこと思い出していただきたい。

「尚」の性は、実際には1430年になって明帝から授かったものである。

父を中山の王位に就けた巴志は、長く続いていた北山、中山、南山の三山鼎立（三つの勢力が互いに張りあって対立すること）状態を解決し、統一に乗り出すことになる。

戦乱の世は、はたして巴志によって治まるのだろうか。

(つづく)

今月の参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、株勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行